

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

世の中は慌しく移り変わるようだが、その反面に根本問題はいつも未解決のまま、うやむやになってしまいうことも多い。その一つに幸福の問題がある。

つまり幸福とは何かという人生の根本問題が、いつもはつきりしないままに、次から次へと、うわべだけの変化に幻惑されながら、ずうっとおし流されてきたというのが実状ではないだろうか。

いつも健康である人は、その健康に慣れてしまい、それが当然であると思なして、いわば自覚状態がなくなる。「自分は健康です。だから幸福なのです」という意識がない。自覚もない。ということとは、幸福であるかどうかも分からないという状態なのではないか。

ところが、病気にかかって苦しんだが、なんとか立ち直って健康に戻ったとき、「ああ、よくなった。よかった」と思う。つまり健康を自覚できたのである。そして、病気で不幸であったときと比べて、「幸福」だと意識する。こうしたときが、本当の幸福なのである。

金があるのは幸福であろう。生活するのにさして不自由もなく、老後も経済的に心配がないとなれば、いよいよもって結構である。けれども、自分が働き、苦勞もして、



## どんな経験も無駄はない

丸山竹秋

勝ち得た財産ではなく、親から譲られたり、勞せずして得た金銭であった場合はどうか。金があるのはあたりまえ、ないのはどうかしているといったくらいの思いしかないであろう。それでは幸福感というものは、どこにもないではないか。

このように見てくると、本当の幸福とは、たんに健康であるとか、金があるとか、困った問題がないとか、そうしたことだけではなく「これが幸福なのだ」と自分で自覚できたときの状態であると、第一に言えるのである。つまり幸福とは不幸と裏腹になっている。いわゆる幸福ばかりの生活に慣れてしまうと、幸福は幸福でなくなるのだ。といって、いつも不幸にあつていなければ幸福にはなれないというわけではない。不幸つまり苦難というものは、無理に自分から引き寄せる必要はないのだ。それは必要に応じて自然に与えられるものなのである。苦難が来たときには、堂々と迎えて、正しく事に処すのが道だ。自分を鍛錬するために、難きを選ぶのはよいが、わざわざ自分の生き方を過らせてまで、あえて苦難をつくるのは不自然である。

それよりも、「この幸福を得られない人もいるだろう。苦難に喘ぐ人もあるだろう。それを思うと、自分が今日の幸福を得ているのは、まことにありがたいことだ。社会に感謝します」との思いでありがたくその幸福を享け、そしてますます社会のために働いていくとき、その幸福感はいよいよ充実する。『繁栄の法則』より）